

日本人学校での生活環境を生かした外国語授業の実践

前在マレーシア日本国大使館附属クアラルンプール日本人学校 教諭
福岡県三井郡大刀洗町立大堰小学校 教諭 佐々木 洋 光

キーワード 在外教育施設、コミュニケーション、小学校外国語、小学校外国語活動、国際交流

1 はじめに

マレーシアは、主にマレー系、中華系（華僑）、インド系の人々で構成されている。そのため母国語であるマレーシア語をはじめとして、中国語（マンダリン）やタミル語なども民族ごとに日常的に使用されている。また、イギリスの植民地であったことや多民族国家であることから公用語は英語であり、多くの人が英語を使用してコミュニケーションを図っている。

また、本校の教育活動の特色のひとつに、外国語の他に「English Communication：以下ECと略す」という授業が位置づいている。これは、小学1年生から中学3年生まで「現地採用の英語ネイティブ教員：以下EC教員と略す」8名が、「OXFORD Family & Friends」の教科書を用いながら週に2時間、習熟度別に行っている。

本校の児童の実態としては、英語が得意でネイティブレベルに話せる児童がいる一方で、転入したばかりで英語に自信がない児童も多い。しかし、英語の学習に対する意識と意欲は高い。小学校外国語では、得意不得意に関わらず全ての児童に学びがある授業にしていくことが命題であった。私は、小学校外国語専科として、児童の生活環境を生かすことは、児童全員にとって学習の必然性を向上させ、学習に意欲的に取り組むことに繋がるのではないかと考えた。

2 クアラルンプール日本人学校の外国語教育について

(1) 外国語教育部の組織について

クアラルンプール日本人学校の外国語教育部は、前述のEC教員8名が所属するEC教育部、小学部外国語専科教員、中学部英語科教員で構成されている。

この外国語教育部では、めざす児童生徒の姿を「異文化理解を通してコミュニケーションを意欲的にとろうとする子どもの育成」と設定し、発達段階に合わせて授業作りを行ってきた。この中で、小学部では、特に「英語で話してみたい」「英語で話すのは楽しい」「伝わった。嬉しい」「もっと話したい」と思えるような、コミュニケーションを意欲的に取ろうとするような姿をめざした。

(2) ECコラボとは

ECコラボとは、「ECコラボレーション」の略称で、EC教育部と小学部外国語が連携をした授業のことである。月に1回程度、EC教員が外国語の授業に参加した。この「ECコラボ」を単元の中に効果的に位置付け、「題材」と「学習過程」の2つを工夫することで、外国語教育部全体でめざす児童生徒の姿に近づけることをめざした。

(3) 題材設定の工夫

ECコラボの題材を検討していく中で、下記の3つの視点に基づいて、マレーシア在住、クアラルンプール日本人学校だからこそできるもの、つまり、「子どもたちの生活環境を活かした題材」となるように工夫した(図1)。

- ① 教科書の内容をもとにしたもの(教科書との関連)
- ② マレーシアの文化や言語、日本文化をもとにしたもの(異文化理解)
- ③ 英語に慣れ親しむアクティビティをもとにしたもの(アクティビティ)

学年	(1) 教科書との関連	(2) 異文化理解	(3) アクティビティ
3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・りんごは、いくつ? ・True-Falseクイズ ・行き先クイズ 	<ul style="list-style-type: none"> ・マレーシアジャンケン ・クリスマスビンゴ 	<ul style="list-style-type: none"> ・形モンスターを描こう ・大文字ビンゴ ・メッセージカード作り
4年生	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフにあいさつしよう ・オリジナルパフェを作ろう ・1日を紹介しよう 	<ul style="list-style-type: none"> ・マレーシア語で自己紹介 ・有名人の名前クイズ ・世界は今何時? 	<ul style="list-style-type: none"> ・小文字ビンゴ ・天気マッチングゲーム
5年生	<ul style="list-style-type: none"> ・できる?できない?クイズ ・レストランで注文しよう 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピクトグラム紹介 ・世界のお祭りの紹介 ・国際交流会に向けて 	<ul style="list-style-type: none"> ・バースデーチェーン ・Message Game ・Board Race
6年生	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な人の紹介 ・食物連鎖の紹介 ・オリジナルカレーの紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・マレーシア語で注文しよう ・マレーシアの文化紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生へ絵本読み聞かせ ・タブーゲーム ・Drawing Pictures Challenge

図1: ECコラボの題材例(一部)

(4) 学習過程の工夫

学習過程を考える際に、各段階で重点を設定した。

「単元導入段階」では、単元のゴールを明確にすることで学ぶ必然性をもたせることで、ワクワク感や期待感を重視した。

「単元展開段階」では、スモールステップで練習したり、やりとりをしたりすることで、自信をもたせることを重視した。

「単元終末段階」では、学びをまとめたものを発表したり、実践したりすることで、達成感をもたせることを重視した。

3 ECコラボ授業の実際

(1) 6年生での実践 (教科書との関連)

NEW HORIZON 6 UNIT 1「This is me!」において、全5時間で構成した。この単元では、「ECコラボ」を単元の終末段階に位置付けた。

第1時(導入)では、私の住むコンドミニアムのガードマンについてスライドにまとめて紹介し、ゴール像がイメージできるようにした。児童は、自分が住んでいるガードマンや習い事のコーチなど、確かに身近にいるけれど、詳しく知らない相手を決めて、本単元の学習をスタートさせた。

第2時(展開)では、まずは「自己紹介」に焦点を当て、自己紹介で使える表現について学習を行った。これ

は、本単元における指導事項である。児童は、既に多くの表現を知っており、使いこなしている児童も多い。そのため、名前と出身地、好きなこと、誕生日の基本表現のほか、自分がPRしたいことについても伝えてよいこととし、表現の幅を広げるようにした。また、友達同士でやりとりする時間を設定し、インタビュー本番をイメージしながら練習ができるようにした。

第3時では、インタビューの際に相手に尋ねる表現について指導した。具体的な表現例としては、Can I have your name? (What's your name?), Where do you live?, Where are you from?, What _____ do you like?, How old are you? などである。こちらも英語が得意な児童については、自由に聞きたいことを聞いてよいことを認め、表現の幅をもたせた。授業では、時間内に何度もペアを交代しインタビューの練習をさせることで、表現に慣れ親しませることができるようにした。

ここから1週間ほど時間を空けた。インタビューをして聞き取った内容をスライドにまとめる期間である。これは、全て家庭学習で取り組ませた。児童は、緊張しながらも自分が決めた相手にインタビューを行い、紹介スライドを作成することができた。配慮した点としては、身近に英語を話す人がいなかったり、負荷が重いと感じたりする場合は、EC教員や学校の清掃スタッフ、ガードマンでもよいこと、インタビューに友達についてきてもらってもよいことを伝えた。また、スライドを作成する際は、HeやHis、三単現-sなどの表現が必要となるため、授業で指導するとともに完成したスライドを添削し個別指導を行った。

第4時は、インタビューをした相手を紹介する時間である。この時間を「ECコラボ」として設定し、EC教員8名が参加した。「導入」の段階でEC教員が身近な人を紹介し、発表のモデリングを行った。その後、4人程度のグループに分かれて紹介を行った。発表を聞いたEC教員や友達からは質問や感想が出るなど、ここでも英語でやり取りをする姿がみられた。また、出身国を聞いてもピンときていない友達に対しては、「Google Earth」を使いながら説明するなど、相手に分かってもらうために工夫する姿もみられた。

児童に感想を聞いてみると、「インタビューをしているときはこの英語はあっているのかなととても心配だった。終わったあとは一気に力が抜けた。」「インタビュー中は緊張したけど、終わったらいままでできたので嬉しかった。」「なんだか相手との関係が深まったと思う。」「意外と大丈夫だった。」「インタビューが楽しいことを知り、英語は楽しい!という気持ちになった。」という前向きな感想が見られた。

その一方で、「なかなか英語が伝わらなかった。」「うまく伝わっているか心配で不安だった。」「難しかった。」などの感想も見られた。しかし、これらの感想は、大人であっても外国の人と会話をするときには感じるところである。その中でも伝わったという実感が感じられ、こうした経験が積み重なることで英語を話すことの楽しさに気付いていけるのではないかと考える。

(2) 4年生での実践 (異文化理解)

本単元では、現地校との国際交流を見据えて、マレーシア語で自己紹介ができるようになることをねらいとし、全4時間で構成した。この単元では、「ECコラボ」を単元の展開段階に位置付けた。

第1時(導入)では、現地校の子どもの国際交流が予定されていることを伝え、「マレーシア語で自己紹介ができるようになる」というゴール像を設定した。

第2時(展開)では、英語で自己紹介ができるようにペアやグループで繰り返し練習をした。具体的な表現例としては、Hello. My name is ~. I'm ~. I like~. My hobby is ~. Nice to meet you. である。

第3時(展開)では、マレーシア語で自己紹介ができるようになる時間である。この時間を「ECコラボ」と

して設定し、EC教員6名が参加した。まず、EC教員がマレーシア語で自己紹介し、モデリングを行った。次に、3つのグループを作り児童は順番に英語で自己紹介を行った。EC教員は、その内容をマレーシア語に言い換えて、児童一人ひとりがマレーシア語で自己紹介ができるように指導した。最後に、グループで練習や全体への発表を通して自信をつけ、国際交流会に向けて決意を新たにした。

国際交流会の後、児童に感想を聞いてみると、「マレーシア語で自己紹介をした瞬間に、相手が笑顔になってくれて嬉しかった。」「本番では、緊張して全部は言えなかったけど、名前と好きなことを言うことができよかった。」「自己紹介をマレーシア語で言えるようになって嬉しかった。」など、「達成感」や「母語を持つパワー」を感じることができたようである。

「英語は世界の共通語」とよく言われるように、言語が異なる人々と関わる際には、共通に理解ができる言語を用いてコミュニケーションを行うことになる。今回の授業では、「マレーシア語を学ぶ」というゴールに達する過程において、「言語」の橋渡し役として「英語」を位置付けた(図2)。今後、子どもたちが世界中の人々と関わる上で、「英語」が果たす役割を実感する一つの機会になったのではないかと考える。

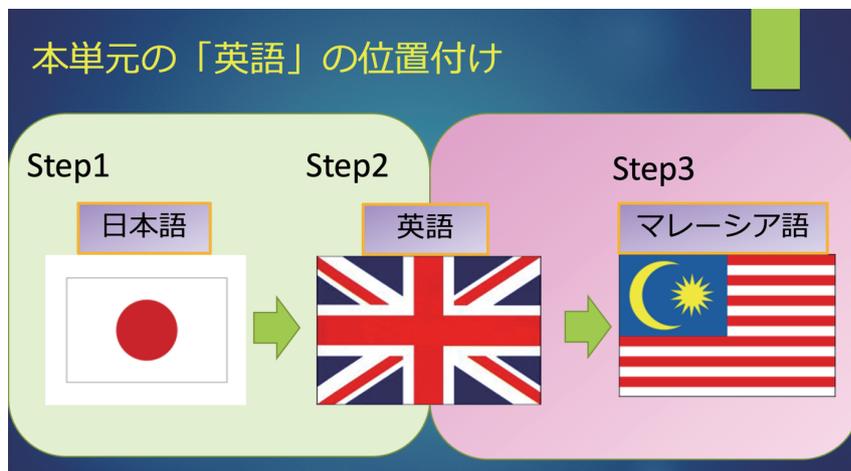


図2:本単元における「英語」の位置付け

4 おわりに

小学校外国語や外国語活動では、言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育むことが求められている。そのためにも、学ぶ意義や必然性を児童に感じさせ、主体的にコミュニケーションを図ることができるよう学習過程の改善・充実を図る必要がある。今回の授業では、単元を通してゴール像を明確にしたことで、外国語の毎時間の授業に目的意識が生まれ、児童の主体性を育むことにつながったと考える。

また、身の周りに英語(外国語)を話す方がいることは、外国語指導にとっては大きな魅力であった。今後は、日本であっても常に児童の周りにはどのような教育資源があり、どのような生活環境にあるのかを意識し、授業づくりを行っていきたい。